

開港の

ひろば

YOKOHAMA
ARCHIVES
OF
HISTORY

Number

157

横浜開港資料館
発行日 / 2024(令和6)年9月21日



特別展 外国奉行

「文久遣欧使節肖像写真」1862年 当館蔵
ベルリンで撮影された幕府遣欧使節の肖像写真。中央が外国奉行・神奈川奉行を務めた松平康直。その左に立つのが帰国後に外国奉行となった柴田剛中。左端は使節正使・外国奉行の竹内保徳。

p.2-5

日米和親条約170周年特別展「外国奉行」—幕末の外務省—

p.6-7

特別公開「横浜とペリー提督とのつながり」

—「横浜上陸図」及び関連資料展示—

p.8-9

資料よもやま話

p.10-12

トピック / 閲覧室より / 資料館だより

日米和親条約170周年記念特別展

外国奉行

—— 幕末の外務省 ——

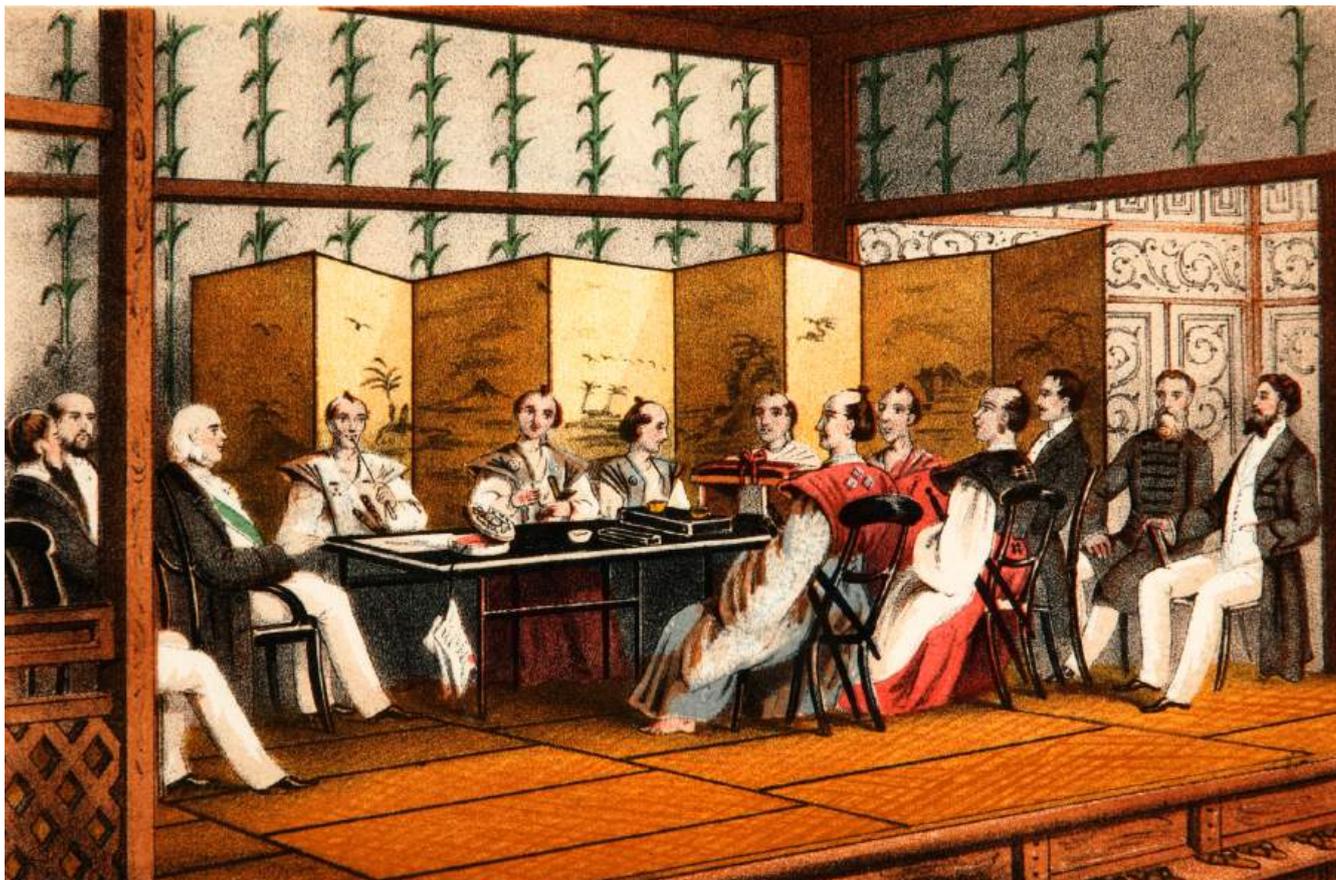


図1 日英修好通商条約の全権委任状の交換 オリファント『エルギン卿遣日使節録』1859年 当館蔵
エルギン卿(左から3人目)と条約交渉を開始する幕府側の外国奉行たち(中央)。そのなかのひとりが井上清直であろう。

はじめに

今年(二〇二四年)は、安政元年(一八五四)にペリーと日米和親条約を締結してから一七〇周年にあたる。その締結地は横浜、まさに当館が建っている場所である。和親条約に引き続き安政五年六月には横浜沖に停泊する米艦上で日米修好通商条約が結ばれる。直後の七月、幕府は欧米の外交官との交渉を担当する常設的な役職として外国奉行を創設した。一方、開港都市横浜には神奈川奉行が置かれ、街の支配と外国人との折衝を担当することになる。外務省と神奈川県の前身にあたるこのふたつの組織については、これまで研究がさほどなされていない。

当館ではペリー来航一七〇周年を記念して、本年の九月二一日(土)から一月二四日(日)まで特別展「外国奉行と神奈川奉行」(Part.1「外国奉行―幕末の外務省」：九月二日～一〇月二〇日 Part.2「神奈川奉行―開港都市を治める」：一〇月二六日～十一月二四日)を開催する。本誌前号(二五六号)では神奈川奉行(所)の施設と業務について紹介したが、今号では外国奉行をとりあげてみよう。

1 外国奉行の誕生

安政五年(一八五八)七月八日、幕府は新たに外国奉行を創設し、水野忠徳・永井尚志・岩瀬忠震・堀利熙・井上清直の五名

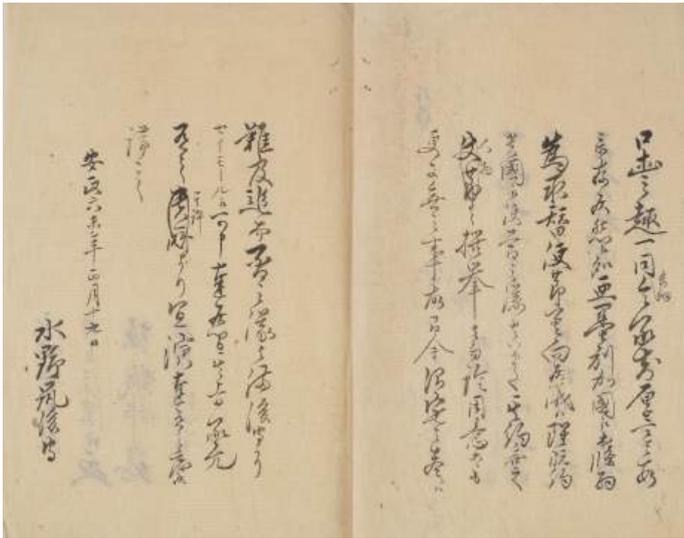


図2 使節派遣を断る外国奉行の書簡(草案)「(貌利太泥亜女王蒸気軍艦指揮役インフレクシブルへの条約取替につき書状)」安政6年(1859)1月19日付 武蔵村山市立歴史民俗資料館蔵

初代の外国奉行井上清直に關係する資料群が武蔵村山市立歴史民俗資料館に所蔵されている(三野行徳氏よりご教示いただいた)。資料(古文書)は武蔵村山市の旧家・渡辺善一郎家に伝わったもので、同家は江戸時代、炭を江戸の大名家・旗本家に納入していた。古文書は取引のあった旗本井上家から反故紙として引き取ってきたものという。

資料群には井上の外国奉行在任期に作成された業務関係の書類が含まれている。たとえば、図2は外国奉行たちが外国人に出した外交文書の「草案」である。安政六年一月二日、英軍艦インフレクシブル号(HMS Inflexible)が品川沖に来航、一七日に艦長ブルーケル(Captain Brooker)は老中太田資始



図3 柴田剛中 個人蔵・国立歴史民俗博物館寄託

を任じた。いずれも外交交渉の経験をもつ俊英の幕臣である。そして、外国奉行のもとに行政組織である外国方を設置した。幕府初の本格的な外交担当部署が誕生したのである。外国奉行創設直前、イギリス使節エルギン卿、ロシア使節プチャーチンが修好通商条約を締結するため来日していた。外国奉行たちの初仕事はのちに安政の五か国条約と呼ばれる修好通商条約の締結であった(図1参照。他、オランダ・フランスと締結)。

奉行は外務次官、あるいは局長クラスに相当するだろうか。外国奉行の職務内容は、安政五年七月の老中の通達(達書)に「外国応接の儀は勿論、貿易筋の御用、そのほかすべて外国へ関係致し候儀は、引き請け取り扱ひ候よう」(東京大学史料編纂所編『幕末外国関係文書』二〇)とあるように、外交交渉のほか貿易に関わる事柄も外国奉行の担当とされた。

所蔵されている(三野行徳氏よりご教示いただいた)。資料(古文書)は武蔵村山市の旧家・渡辺善一郎家に伝わったもので、同家は江戸時代、炭を江戸の大名家・旗本家に納入していた。古文書は取引のあった旗本井上家から反故紙として引き取ってきたものという。

と面会し、イギリスへ使節を派遣するよう要望した。本書簡は使節派遣を断るブルーケル宛の返書草案で、外国奉行水野筑後守(忠徳)・永井玄蕃頭(尚志)・井上信濃守(清直)・堀織部正(利熙)・村垣淡路守(範正)の名が末尾に記されている(うち井上と堀は花押を捺している)。本書簡については実際に外国側に交付した正式な返書が『幕末外国関係文書』二二に所収されており、この草案との比較が可能である。正式な返書が、使節派遣の提案に謝意を表し(「厚意 忝く存せられ候」)、今後の派遣に含みを持たせながら丁寧な謝絶しているのに対し、草案では、使節派遣に

2 外交交渉に奔走

ついて「その約これなく(派遣の約束は)そもそも)なされておらず」、「人物の撰挙は勿論用意等も更にこれなく(派遣する人物の選定は)もちろん、準備をまったくおこなっていない」など、なかなかストレートな表現を使用して要望を断っている。外交文書の推敲過程がわかるとともに、外国奉行たちの本音も透けて見える貴重な文書である。

外国奉行を務めた人物のひとりに柴田剛中という幕臣がいる(図3)。安政五年

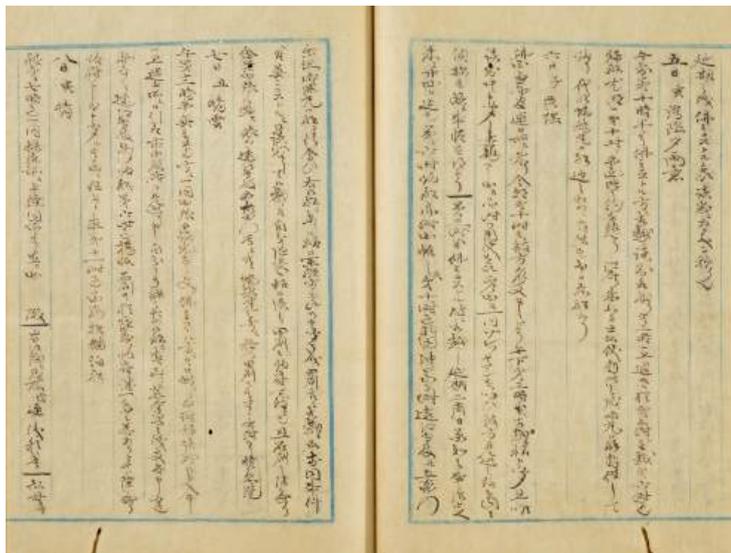


図4 柴田剛中の日記「日載(三)」文久3年(1863)3月5~7日条
個人蔵・国立歴史民俗博物館寄託
柴田剛中は文久2年12月28日に外国奉行並を命じられており、生麦事件の償金支払い問題について、各国との交渉に奔走した。(本資料は特別展Part2「神奈川奉行」展で展示します。)



図5 横浜の絵図「(運上所・異人館などが描かれた横浜地図)」
個人蔵・国立歴史民俗博物館寄託
柴田剛中の旧蔵資料のなかの横浜の絵図面。慶応2年(1866)10月の横浜大火以前のものだろう。



図6 日蘭親善記念メダル 個人蔵・国立歴史民俗博物館寄託
片面に「両国親睦 益 篤」と刻印され、反対の面には葵紋・日の丸がデザインされている。文久2年(1862)にオランダで授与されたもの。

(一八五八)の外国奉行の創設と同時に、その「次官」ともいえるべき外国奉行支配組頭に就任。文久三年(一八六三)に外国奉行、慶応三年(一八六七)には兵庫奉行となり、兵庫(神戸)開港の指揮をとった。幕末に二度ヨーロッパに渡航した経験もあり、外国方の創設から幕府倒壊まで一貫して「外交畑」を歩いた外務官僚である。その関連資料が昨年(二〇一三年)、国立歴史民俗博物館に寄託されることになった。

柴田は、嘉永二年(一八四九)正月から明治六年(一八七三)四月まで、一一八冊もの日記を書き残しており、欧米外交官との外交交渉に奔走しているようすも見てとることができる。たとえば文久三年二月、イギリス代理公使ニールは前年八月に発生した生麦事件の賠償金を幕府に要求し、認められない場合は戦争を開始する可能性を示唆した。しかし攘夷(外国人排斥)の勢いが強かったこの時期、幕府は賠償金の支払いを簡単に認めるわけにはいかなかった。戦争開始を恐れ、多くの者が江戸・横浜から郊外へ避難する。街は混乱に陥っていた。

三月七日、柴田は若年寄有馬道純に同行して「午第十二時半英ミストル方(横浜のイギリス公使館)へ一同出張」した。要求に対する回答期日が迫っていたが、柴田たちは一五日間延期することの同意を得る。それから「仏ミニストル方」にも廻り、同様の交渉をおこなった。一行はいったん運上所に戻ってから、横浜市中を「見廻」つた(図4)。日記には連日の交渉の様子と、柴田が関連する種々の準備に忙殺されていたことが記される。三月上旬から四月上旬、外国方の属僚はこの交渉で多忙を極め、「四日五日の徹夜に疲れ御堀端を歩行ながら居睡を成したる迄に至れり」とい

う状態だったという(福地源一郎「懐往事談」)。
柴田剛中の資料群には古文書のみならず、箱館(函館)・神戸・横浜等開港地の絵図(図5)、ヨーロッパで撮影した使節一行の肖像写真や同地で得たメダル(図6)、自身所用の刀剣や拳銃なども含まれており、外国奉行の業務と幕臣の生活を総合的にうかがうことができる。今回はその資料群から約三〇点をお借りして出陳する。目玉資料となる一群である。

3 外国人の警備

横浜開港後、物価が上昇し、外国人に対する反感が増しつつあった。横浜や江戸では外国人殺傷事件が発生、治安は悪化する。万延元年（一八六〇）二月、江戸の赤羽橋付近（現港区）でアメリカ公使館通訳のヘンリー・ヒュースケンが暗殺された。西欧の外交団は大きな衝撃を受け、幕府に警備体制の強化を要請する。文久元年（一八六二）一月一八日、幕府は講武所（幕臣の武術教習機関）から武芸に優れた者



図7 夜警の役人たち フェリーチェ・ベアト撮影 元治元年(1864) 当館蔵

を抜擢し、「外国御用出役」という名称で三〇〇名を外国方の指揮下に入れた。外国人警備専門部隊の誕生である。同部隊は文久三年九月一三日、以前より存在した外国奉行手附と統合され「別手組」と改称されることになる（図7）。別手組の隊士に武島金三郎道興という幕臣がいる。金三郎の関連資料は現在目黒区めぐろ歴史資料館が所蔵しているが、別手組隊士の資料は他に存在が知られておらずたいへん貴重な資料群である。なかでも、金三郎が別手組出役肝煎として外国人警備の指揮にあつていた

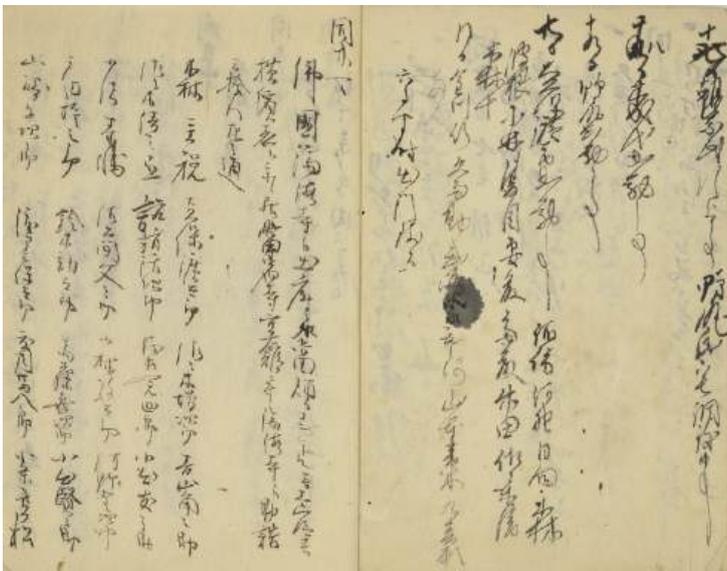


図8 武島金三郎の日記 「日記 参番類」慶応元年(1865)5月21日条 目黒区めぐろ歴史資料館蔵 この時期欧米外交団は主に横浜に居住し、用向きのあるときのみ江戸の公使館に滞在した。

慶応元年（一八六五）の日記からは、別手組の活動実態がわかり興味深い。たとえば、四月一九日には大砲の「火入稽古」、小銃の「手前稽古」があり、金三郎のグループ（「三番類」）からも人員が参加、翌二〇日にも「槍術稽古」があつた。一方五月二〇日、オランダ人士官一名と婦人一名の「附添」（警備）のため、二〇名の隊士が派遣されている。二一日にはフランス公使館の三田濟海寺（現港区）に外交官がやってきたため、同寺に三〇名の警備人員を動員した（図8）。別手組は日々武術の訓練をおこなないながら、江

戸にやってきた外国外交官の警備にあつていたのである。

くわえて金三郎の別の資料からは、別手組が元治元年（一八六四）に常陸（現茨城県）で発生した天狗党の乱や慶応二年の長州戦争など、警備・軍事に関わる幅広い任務に動員されていくことも判明する。外国方が創設した別手組は、その軍事的な力量が評価され、外国人警備以外でも重要な役割を果たしていく。

おわりに

外国奉行と外国方は明治元年（一八六八）の幕府瓦解の後、その役割を明治政府に引き継いだ。新政府の外交機構は初期に目まぐるしい組織改編があつたが、奇しくも外国奉行の設置と同日、明治二年七月八日に外務省が創設される。

幕末期の日本をめぐる国際環境は厳しいものがあつた。一方、国内では外国人に対する反感が強く、攘夷運動は社会を混乱に陥れた。このような困難な状況下にあつて、外国人と向き合つて外交懸案を解決していかねばならなかつた外国奉行と外国方の役人たちの苦勞は想像に難くない。展示資料の行間から侍たちの辛苦も想像しつつ、展示をご覧いただければと思う。

（吉崎雅規）

ペリー横浜来航170周年

横浜とペリー提督とのつながり

—「横浜上陸図」及び関連資料展示—



図1 展示会場の様子

はじめに

二〇二四(令和六)年七月十三日(土)〜九月一日(日)にかけて、横浜開港資料館(以下、当館)が所蔵するペリー関連資料約八〇点を展示する特別公開(以下、本展示)を開催しました。一九八一(昭和五六)年の開館以来、当館ではペリー関連資料を収集し、開館記念展示及び二〇〇四(平成一六)年の開港一五〇周年展示の二回、ペリー提督関連の展示を開催しています。ペリー提督の横浜来航から一七〇年に

あたる今年、横浜とペリー提督とのつながりを広く周知することを目的に、当館所蔵のハイネ画「横浜上陸図」(石版画)をはじめとしたペリー関連資料を展示し、ペリーの横浜上陸を見守った「たまくす」の木のある当館が、横浜の歴史の重要な場所の一つであることを伝えました。さらに、ペリー艦隊来航時に横浜村名主であった石川家がペリー家と交流した際の資料やブルーム・コレクション内のペリー来航関係資料を初めて展示することで、新たに横浜とペリー提督とのつながりを見出しました。

ハイネ画「横浜上陸図」

(石版画)ほか2点の公開

ペリー艦隊の一員として遠征に参加した画家ハイネは、遠征の記録として当時の日本の様子を伝える数多くの絵を残しています。そのなかで、彼の代表作と言えるのが日本遠征の重要な場面を描いた水彩画六枚で、帰国後にブラウンによってそれらは石版画に仕立てられ、『日本遠征画集』(一八五五年)として刊行されます。当館ではこのうち「横浜上陸図」、「ルビコン川」、「久里浜上陸」の三点を所蔵し、なかでも「横浜上陸図」は、一八五四年三月九日(嘉永七年二月一〇日)にペリー提督が横浜に上陸し、横浜応接所に入る様子を描いており、絵の右側には当館中庭にある「たまくす」の木が描かれています。その後、三月三一

日(三月三日)に日本開国の第一歩となった日米和親条約が横浜で締結されることを示すこの絵は、しばしば出版物等に掲載される資料です。

当館ではこの「横浜上陸図」を二〇一六年に修復し、本展示が修復後初公開となります。出版物等でもよく知られている資料ですが、実物を見る機会は少なく、本展示では、期間限定で実物展示を行いました。「横浜上陸図」は、「たまくす」の木と並んで、横浜の歴史の重要な資料の一つであり、当館のアイデンティティとも言えます。本展示を通じて、当館の建つ場所付近にペリー提督が上陸し、日米和親条約が締結された場所であることを多くの方に伝えることができましたと考えます。

石川家とペリー家の交流

日米和親条約締結後の四月六日(三月九日)に、ペリー提督は横浜村を散策しています。このときの様子は『ペリー艦隊日本遠征記』に詳細が記され、散策の途中でペリー提督は横浜村名主石川徳右衛門宅を訪れ、同家で供応を受け、ゆったりとした時間を過ごしました。また、一緒に同行していたウィルアムズの『ペリー日本遠征随記』には、石川徳右衛門が同日夜にポーハタン号を訪れ、船員たちと交流したことが記されています。

このような縁のある両家ですが、一九八二(昭和五七)年に石川徳右衛門のこ子孫の石川仲子氏がアメリカのペリー家を訪問し、両家は一二八年振りに交流しました。石川仲子氏が



図2 ハイネ画「ペリー提督・横浜上陸図」(石版画)

でも興味深い資料として、「ペリー一行の上陸図」と題する資料(図3)は、これまでのペリー提督の上陸図とは少し違った構図となっています。この絵には星条旗が描かれず、ペリー提督が上陸する際には数百人単位で上陸しています。もしかするとペリー提督ではなく、アドムス中佐らが横浜で条約交渉の会見地を下見するために上陸したと描いたものかもしれませんが、情報が少な過ぎて断定はできません。もしどこかに原本が残されていれば、さらに詳しいことがわかるかもしれません。

今回、初めて公開したブルームコレクション内のペリー来航関係資料は、異国船や外国人に民衆が大いに興味関心をもち、各地に情報を伝えるために模写された資料が数

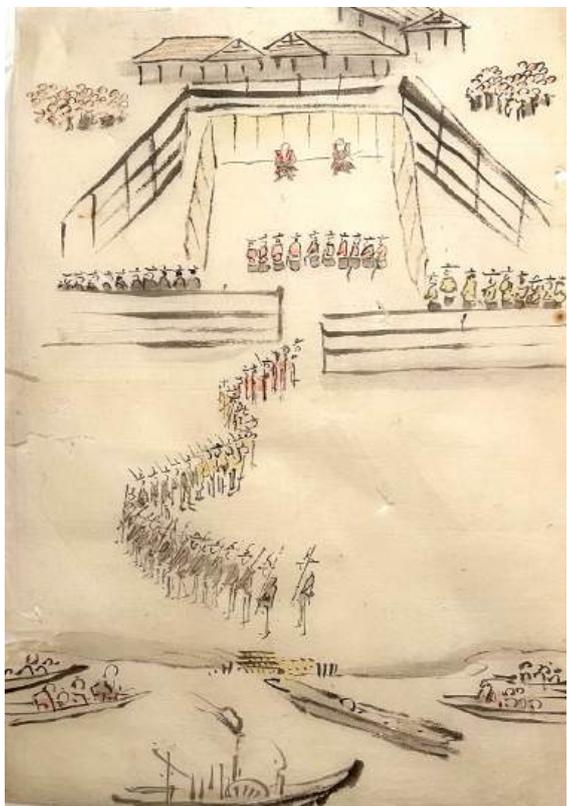


図3 「ペリー一行の上陸図」(ブルーム・コレクション)

多く残っていることを示しています。今後、こうした資料から新しいことを見つけることができる可能性を秘めています。

おわりに

一七〇年前にペリーが横浜に来航し、日米和親条約を締結し、日本は開国の第一歩を踏みました。日本近代の始まりとなった重要な出来事が起きた場所が横浜でした。本展示ではなぜ横浜が会見地に選ばれたのかにも触れながら、横浜の歴史の生き証人である「たまくす」の木を紹介しました。「横浜上陸図」にも描かれた「たまくす」の木は、ペリーの上陸を見守り、二度の災害を受けながらも先人たちによって大切に保存され、横浜の歴史を見守り続け

(白井拓朗)

ら当館に寄贈された約四〇点の資料は、そのときの資料となり、本展示ではペリー提督のご子孫のコモドール・A・ペリー氏やコモドール氏の母から石川伸子氏に宛てた手紙や写真などが初公開となりました。これまであまり知られてこなかった石川家とペリー家とのつながりがあったことを今回の展示で伝えることができ、新たな横浜とペリー提督とのつながりを見つづけることができました。

ブルーム・コレクション内 ペリー来航関係資料

横浜山手で生まれ、日本関係資料蒐集

家のポール・C・ブルーム氏は、当館が開館する際に自身のコレクション(稀少本、地図、浮世絵など)を横浜市に寄贈してください。現在ブルーム・コレクションとして公開されています。そのなかには作者や制作時期は不明なものも多いですが、ペリー来航関係の資料が含まれています。なか

てきました。「たまくす」の木は「横浜上陸図」と共に横浜の歴史を示す重要な資料の一つで、これからも大切に保存していきます。

現在の横浜が誕生するきっかけとなったのが一七〇年前のペリー提督の横浜来航です。本展示では当館がこれまで収集してきた「横浜上陸図」をはじめペリー関連資料を展示し、横浜とペリー提督とのつながりを改めて伝えました。さらに、石川家とペリー家との交流やブルーム・コレクションの資料から横浜とペリー提督との新たなつながりを示すことができました。これからは当館ではペリー関連の資料を収集し、横浜の新たな歴史の発見につなげていきたいと思っております。

資料よもやま話 横浜市民が 撮影した 関東大震災

昨年、二〇二三年（令和五）年は関東大震災一〇〇年の節目の年であり、各地で震災をテーマとする展示会が開催された。当館でも、姉妹館である横浜都市発展記念館と合同で特別展「大災害を生きた抜いて―横浜市民の被災体験―」（会期・二〇二三年八月二六日～一二月三日）を開催し、各種メディアに取り上げられ、多くの来館者を得た。本展示の結果の一つとして、報道や展示を見た市民から、従来知られていなかった震災関連資料の寄贈依頼を複数受けたことが挙げられる。本稿では、新たに寄贈を受けた資料のうち、震災時に中区本牧地域に居住していた横浜市民が撮影した震災関連写真について紹介する。

今回寄贈を受けた資料は、寄贈者である永山直子氏の祖父、入野基が撮影した震災関連写真真群である。基は成田銀行や川崎貯蓄銀行などで要職を務めた父、廣之助の長男として一八七六（明治九）年に生まれ、一八九三（明治二六）年に横浜のモルフ商会に勤務したほか、

ベッカ商会の染料薬品部門主任を務めた。一九一（明治四四）年に病を得て東京市下谷区で一時静養することを余儀なくされたが、震災発生時は家族とともに本牧に居住していた（古林亀治郎編『現代人名辞典』中央通信社、一九二二年）。関東大震災では、入野家の家族は無事であったものの家屋は完全に倒壊する被害を受ける。基は倒壊した被災直後の自宅と家族を撮影したほか、震災翌年における横浜の被災地を多く撮影

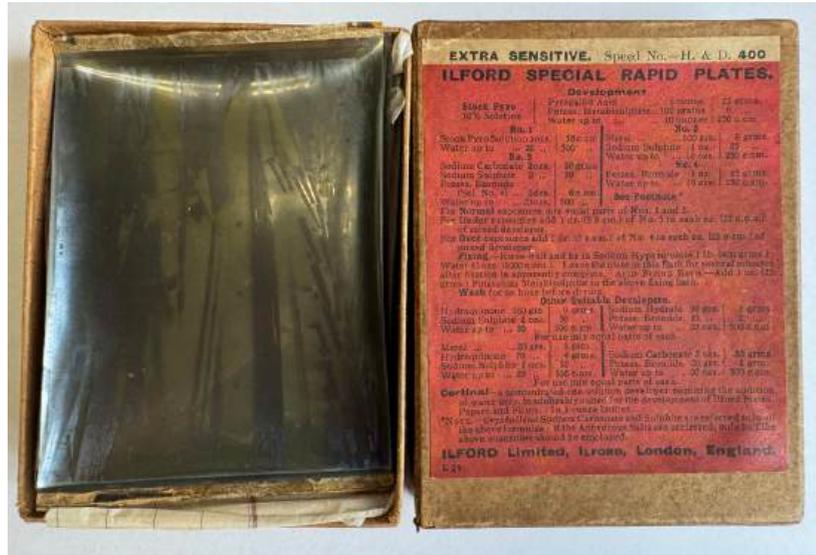


図1 寄贈された震災写真フィルム



図2 倒壊した入野家家屋

している。寄贈資料には、震災写真一二点が所収されたアルバムが含まれているほか、原板である写真フィルム一四点【図1】が含まれている。アルバムに収められた紙焼写真の裏面には、撮影時期と場所の説明書きが記されており、写真の詳細が把握できることが本資料群の価値を高めている。

基が撮影した資料の中でまず注目できるのが、被災直後に撮影した自宅の写真である。【図2】の写真裏には、「大正十二年九月ノ大震災にて自宅倒壊家屋ノ瓦全部ヅリ落ち木羽葺ヲ通シテ棟木見ユ」と記されている。この記述の通り、写真には一階部分が屋根に押しつぶされて倒壊し、瓦が屋根から落ちて棟木が木羽葺屋根の隙間から露出している様子が写されている。震災時における入野家の人々の避難状況の詳細は伝わっていないが、家屋倒壊の状況から察するに、家屋が完全に倒壊する前に、家族全員が屋外に避難して一命をとりとめたも



図3 屋外に避難した入野家の人々



図4 屋外に避難した人々の様子



図5 相生町の震災犠牲者慰霊塔

のと推測できる。自宅が倒壊してなお余震が続き、様々なデマが流れる混乱した状況下にあっても、基は倒壊した家屋内にあったと思われるカメラを取り出し、家屋の被災状況と家族が屋外に避難する状況【図3・4】を撮影したのである。未曾有の震災被害を記録しようとする基の強い意志がうかがえる写真といえよう。

また、寄贈資料には、震災翌年の一九二四(大正一三)年三月に横浜市内の被災状況を撮影した写真群が含まれ

ている。このうち、興味深いのが中区相生町の震災犠牲者慰霊の様子を撮影した一枚である【図5】。写真裏面に「十三年三月十日 横浜相生町の法要跡」と記された本写真には、「如来妙色身 為大震災相生町(以下判読不能)」と記された法要塔と、死者追悼の献木と思われる樹木が並んでいる様子が撮影されている。横浜市市史編纂係編・発行「横浜震災誌」(第二冊、一九二六年)によれば、相生町は震災前に戸数三百六戸、人口約一千五百人を有していたが、震災

によって町内の家屋は土蔵一つを除いてすべて全潰あるいは半潰し、生き埋めとなつて一家全滅となった世帯も多かったという。この後、町を襲った激しい火災のため、町全域が焦土となった。同書には、生き残つた相生町の住民たちが横浜公園に避難して助け合いながら避難生活を送り、比較的早期に元の居住地跡に戻つたことも記されている。本写真からは、町に戻つた住民たちによって早い段階で震災犠牲者の慰霊法要が行われたことが想像でき、近隣の犠牲者を悼む相生

町住民の思いの強さが推察される。横浜の震災被害状況を撮影した写真は数多く残されており、近年研究が急速に進展しているが、写真撮影を職業とする写真師や公的な職業に就く人々が撮影したものが多く、個人が私的に撮影した写真は希少といえる。同様の写真を保存されている方は、是非、当館まで情報のご提供をいただければ幸いである。

(西村 健)

かつての色が よみがえった イギリス総領事館

トピック

当館では、二〇二二(令和五)年七月から二〇二四(同六)年二月にかけて、横浜市指定文化財である旧館(旧イギリス総領事館、昭和六年竣工)の外観整備工事を実施しました(図1)。工事では、イギリス総領事館として親しまれてきたかつての外観を復原することを目的として、煙突の耐震補強、剥落防止ネットの撤去、銅板屋根の一部葺き替え、雨仕舞の更新、外部建具の塗装などをとおこないました

が、建物に残された古い

い痕跡を調査するなかで、それまで紺色に塗られていた扉や窓枠の色が、以前は緑色であったことが判明しました。

文化財の建物を修理する場合には、竣工から現在にいたる改修の履歴を丁寧に調べて、後世の手が加わっている部分については、その価値を検討しうえて、以前の色や形に復原することが一般的です。建物各部の色については、塗装を丁寧にとり落としていくことで、当初からの色の変遷を調べていきますが、調査の結果、扉や窓枠などで、現在の紺色に塗られる前に、緑色に塗られていた時代

があったことが確認されました(図2・3)。

ちょうどその頃、イギリス総領事館が閉鎖された一九七二(昭和四七)年当時、副領事としてこの建物に勤めておられたデヴィッド・コッカハム(David Cockeham)氏が、偶然にも来館されました。コッカハム氏からは、領事館時代に建物がどのように使われていたのかなど、たいへん貴重なお話を伺うことができましたが、あわせて領事館時代の写真をご提供いただきました(図4・5)。

図5は建物の東面(現在の開港広場側)で、入口上部にイギリス王室の紋章が掲げられ、右側には、真鍮製とみられる領事館の案内プレートが設置されていたことがわかりますが、扉や左右の小窓の鉄格子などが緑色に塗られています。今回の工事では、これらの資料をふまえて、扉と窓枠をかつての緑色に復原しました。

当館へご来館の際には、展示とあわせて、これまでと少し印象が変わった旧館の姿もぜひご覧ください。

(青木祐介)

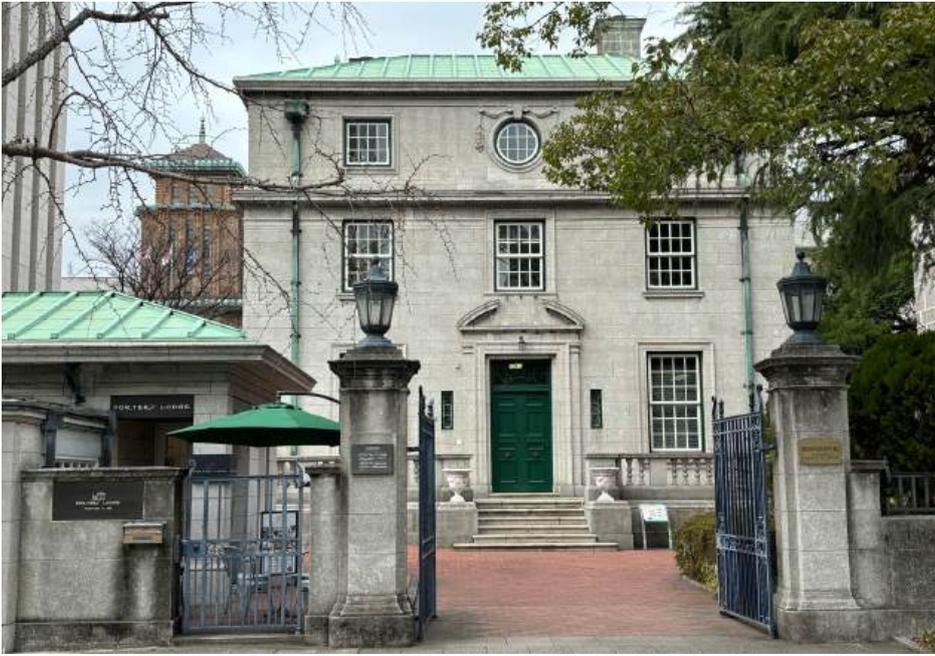


図1 外観整備工事が完了した旧館 2024(令和6)年2月



上段右:図2 塗装調査:南面ドーマー窓の通風ガラリ(株式会社ユー・エス・シー提供)

上段左:図3 塗装調査:西面中央扉脇小窓の鉄格子(株式会社ユー・エス・シー提供)

下段右:図4、左:図5 1972(昭和47)年頃のイギリス総領事館(デヴィッド・コッカハム氏提供)

嘉永7年3月3日(1854年3月31日)、ペリー一行と幕府応接掛とのたび重なる交渉を経て、日米和親条約が現在の横浜開港資料館周辺の地で結ばれました。日米和親条約のうち日本側の原文書は江戸城の火災で焼失しましたが(アメリカ側の原文書は米国国立文書館所蔵)、条文の内容は『大日本古文書 幕末外国関係文書之五』(覆刻版、東京大学出版会、1972年)で確認することができます(蘭文を除く)。

日米和親条約については、さまざまな学術的見解が提示されています。今回はそうした研究成果のごく一部ではありますが、紹介していきたいと思えます。

◆「鎖国」は終わり、「開国」したのか

『大日本古文書 幕末外国関係文書』編纂に携わった石井孝氏(1909-96)は、日米和親条約に通商は規定されなかったものの、「わが鎖国制度は大きく破られた」と述べています(『日本開国史』吉川弘文館、1972年、107頁)。

一方、羽賀祥二氏は幕府による近代的な外交理念や原則の受容過程に着目し、「幕府は外交関係について通信・通商・和親の三種の次元の異なる関係を設定していた。そして鎖国体制(通信通商関係のみに外交関係を限定する体制)の下での異国船対策であった薪水給与と令を和親関係の根拠とし、通信・通商との区別を強調することによって鎖国体制には基本的変化がないと考えたといえるだろう」としています(『和親条約期の幕府外交について』『歴史学研究』482号、1980年)。

また、三谷博氏は日米和親条約について「限定的開国」を取り決めた「開港条約」と捉え、「西洋・日本ともに開国の主要な指標としていた「通商」関係を排除し、「通信」関係すなわち正式の国交についても不問にすませたのである。この事実は、幕府がペリーの軍事的威圧に完全屈服・譲歩したのではなく、鎖国政策を能う限り維持する道を選び、それにある程度成功したことを示唆している」(『明治維新とナショナリズム』山川出版社、1997年、134頁)と幕府の対応を評価しました。

当時の幕府の交渉担当者は「鎖国」を守るべき「祖法」とし、朝鮮・琉球を通信(国交)の国、オランダ・中国を通商(貿易)の国と位置付けていました。日米和親条約によって下田・箱館は開港しましたが、通信・通商を認める条約ではなかったという点が注目されてきわけです。

こうした中、横山伊徳氏は「外交交渉と現実社会がある均衡点を見出すという折衷的社会」の存在を肯定しつつ、「しかし、それは日米和親条約締結＝「開国」の結果であって、日本近世の外交体制がそうした変態を自律的に遂げたのではない」と述べています。和親条約の画期性を改めて強調し、従来の研究潮流に再考を促しています(『日米和親条約再考』『歴史地理教育』938号、2022年)。

◆幕府の対外交渉能力再検証

日米和親条約調印にあたっては漢文・蘭文・和文・英文の各版が作成、交換されましたが、それぞれに記された文意は微妙に異なっていたため、日米双方の条文解釈に違いが生じることになりました。そうした条約の多義性に注目した研究の進展にともない、幕府の対外交渉能力が見直されるようになりました。

加藤祐三氏はペリー側が提示した条約草案の交渉に際して「数のうえで幕府が優勢、言語能力・法律知識のうえでも幕府は劣勢とはいえない。迫られて始まった交渉だが、ここにきて幕



応接所での交渉に臨むペリー 『日本遠征記』1巻所収 横浜開港資料館所蔵

府は攻勢に転じた」としています(『黒船前後の世界』岩波書店、1985年、355頁)。幕府の主体性を高く評価する加藤氏の見解は、のちの研究に大きな影響を与えました。

井上勝生氏は「幕府の全権代表林大学頭復斎の外交姿勢については、通説では無知、無能な対応が強調されてきたが、そうであろうか」と疑問を投げかけ、「偏見を廃して幕府の外交を評価する必要がある」と踏み込んだ指摘をしています(『日本の歴史18 開国と幕末変革』講談社、2002年、190・191頁)。

一方、鶴飼政志氏は「条約内容の解釈については、清国と同じく恣意的なものにすぎず、正確な理解であったとは言い難い」と幕府の国際法理解の限界を示唆しています(『明治維新の国際舞台』有志舎、2014年、44頁)。

幕府の対外政策について異なる評価が生み出される背景を紐解いた麓慎一氏は「幕府の対外政策が過度に拙劣であった、と評価することも妥当ではない」としつつ、「しかし、幕府に交易の許可を押しとどめさせたのは、徳川齊昭と彼に期待する勢力である。したがって、この点に幕府の対外政策を高く評価する根拠を見いだすことは困難であろう」と前水戸藩主徳川齊昭の影響力を重視しています(『開国と条約締結』吉川弘文館、2014年、251～253頁)。

◆幅広い研究史を把握する

幕末期の対外関係史研究の成果については、後藤敦史「幕末期対外関係史研究の現在」(『歴史評論』812号、2017年)、吉岡誠也「幕末期外交・貿易・海防史研究入門」(『歴史評論』875号、2023年)、横浜を中心とした情勢については吉崎雅規「幕末期横浜に関わる研究動向」(横浜開港資料館・横浜幕末維新史研究会編『幕末の開港都市・横浜』戎光祥出版、2024年)をご参照ください。本稿で紹介しきれなかった複雑で多岐にわたる貴重な研究成果が端的に整理されています。

日米和親条約や幕府の交渉能力をめぐる評価の多様性は、当時の対外関係や交渉過程の複雑さを反映したものであるでしょう。

今後は海外資料の調査がさらに進展し、新たな見解が提示されていくのではないのでしょうか。また、地域社会の視点から日米和親条約の意味を捉え直していくことも課題となるでしょう。調印から170年。日米和親条約の研究は更新され続けています。

(神谷大介)



特別展

「外国奉行と神奈川奉行—幕末の外務省と開港都市—」

会期: Part1「外国奉行—幕末の外務省」:
9月21日(土)~10月20日(日)

Part2「神奈川奉行—開港都市を治める」:
10月26日(土)~11月24日(日)

*Part1・2では展示資料全点が入れ替えとなります。

10月22日(火)~25日(金)は展示替えのため特別展はご覧いただけません。



入館料: [各期] 一般500円

小・中学生/横浜市内在住65歳以上
250円

[Part1・2共通入館券] 900円

展示関連企画

○展示解説

9月29日(日) 15時~11月8日(金) 10
時30分~ それぞれ40分程度

予約不要 ※特別展観覧料が必要

○トークライブ「幕末の外交官を深掘りする!」(事前申込)

日時: 10月9日(水) 13時30分~16時

「幕末外交文書の紹介」

講師: 小野将氏(東京大学史料編纂所准教授)

「ハリスからみた幕府外国方」

講師: 福岡万里子氏(国立歴史民俗博物館准教授)

参加費: 500円 定員: 40名

○特別展関連講座(事前申込)

(1)「外国奉行—幕末の外務省」

10月20日(日)

(2)「神奈川奉行—開港都市を治める」

11月16日(土)

各講演: 15時~16時30分

参加費: 各回500円 定員: 各40名

○まち歩き「神奈川奉行所ゆかりの地を歩く」(事前申込)

日時: 11月13日(水) 14時30分~16時
30分

参加費: 500円 定員: 20名

○展示関連図書

横浜開港資料館編『外国奉行と神奈川奉行』
A4判 192ページ 2,500円(税込)

約250枚の図版で2つの組織について紹介
します。専門研究者の論考も収録。

ミニ展示

ペリー横浜来航170周年記念ミニ展示

会場: 常設展示室内ミニ展示コーナー

◆パート3「黒船接近! 絵図による幕末の海防体制」

会期: 8月16日(金)~11月21日(木)

当館収蔵の海防御固図(かいぼうおかためず)(幕府が諸大名に命じた警衛の配置図)から、横浜周辺における海防体制の変遷を紹介いたします。

◆パート4「モーリー大尉の日記」

会期: 11月22日(金)~2025年2月20日
(木)

ペリー艦隊の一員で海図や水路図作成の専門家、モーリー大尉自筆日記から、彼がどのように測量を行っていたのかを紹介します。

寄贈資料

・大津一男氏旧蔵文書 170点
(大津勝子氏)

・小杉家資料 17点(小杉尚子氏)

・イリス商会宛葉書 1点(山田幸信氏)

・中沢磯一家文書 356点(本田章子氏)

・袖垣図 1点(押尾梅夫氏)

・田中三郎日記 1点(田中正洋氏)

・捜真女学校関係資料 10点(松岡正樹氏)

・入野基・コウ関係資料 27点

(永山直子氏)

たまくすの木クラウドファンディングが成立しました!

5月21日から実施していた「たまくすの木(横浜市地域史跡)」周辺にバリアフリーデッキを整備する地域循環型のクラウドファンディングが、多くの皆様のご支援により目標金額の500万円を超え669万7千円という結果になりました。



バリアフリーデッキ完成イメージ

横浜開港資料館 利用案内

開館時間 9:30~17:00(入館は16:00まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始ほか

入館料 一般200円 小・中学生/横浜市内在住65歳以上100円

*特別展「外国奉行と神奈川奉行—幕末の外務省と開港都市—」会期中
一般500円 小・中学生/横浜市内在住65歳以上 250円

閲覧室の利用について

事前予約制(先着順)です。閲覧希望日前日の開室時間中に、電話で予約してください。

開室時間 10:00~12:00 13:00~16:00

休室日 月曜日・火曜日(祝日の場合は翌日)、資料整理日(毎月第4金曜日)、年末年始ほか

利用料 100円(閲覧室のみご利用の場合)

電話番号 045-201-2150(直通)

ミュージアムショップ & カフェ PORTER'S LODGE

営業時間 9:30~17:00(カフェラストオーダー16:30)

店休日 開港資料館に準じます

アクセス

・みなとみらい線「日本大通り」駅4番出口から徒歩2分

・JR関内駅(南口)、市営地下鉄関内駅から徒歩約15分

・JR桜木町駅から市営バス「日本大通り駅県庁前」
下車、徒歩1分

ホームページ

<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

X(旧Twitter) @yoko_archives

Instagram @yokohama_kaikou

管理運営団体 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団



*今後の状況により変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ・お電話でご確認ください。